「いつまでも信頼せよ」イザヤ書 26 章 1-21 節

2023.7.30　礼拝

序論）

　みなさん、おはようございます。先週は夏休みを取らせていただいて、母の納骨や家族との交わりの時間を持たせていただきました。ありがとうございます。

　先週は、非常に熱い一週間で金曜日に北海道に戻ってきたら、こちらも本州と同じような暑さだったので非常に驚きました。それでも、お互い守られて今日も一緒に礼拝をできることを感謝いたします。

　さて、みなさんは絶望をしたことがありますでしょうか。絶望とはいわなくても、人生に望みを抱くことを諦めたくなるような時ってあるでしょうか。この説教をつくるために調べてみると多くの人が絶望を感じた時があるようでした。重い病気になったとき、職場の人間関係に疲れたとき、上司や家族からのパワハラにあったとき、自分の努力が無駄だと思ったとき、多くの人は絶望を感じると言っています。

　それはその通りだと思います。どんなに頑張ったとしても、自分より上の立場の人が不当な圧力をかけてきたり、周りの環境が理不尽なものだったりすると、希望をもって生きることが難しくなりますし、なんとかしようとして努力しても結果に繋がらなかった時は、もうだめだと思います。

　イザヤから見た。イスラエルの置かれた状況というのはある意味でそのような状況でした。歴代の王たちは神を恐れずに人を恐れて、結果的に神様の裁きを招くことになり、彼らなりに最善を尽くして、周辺諸国と協力関係を結んでもアッシリアやバビロンという力の強い国によって侵略されてしまう。もはや手がないと思えるような絶望的な状況でした。しかし、それでもイザヤは神様から希望が与えられていました。

　今日は、絶望的な未来が示されながらも、それでも希望が与えられたイザヤの預言を通して、私達が持つべき希望について教えられていきたいと思います。

１）【主】に信頼せよ。

　これから話すことは、ある意味でこのイザヤ書 26 章の結論です。これから紹介する一つのみことばを覚えてくだされば、今日のメッセージは全部聞いたと同じといえるような御言葉があります。それはなにかというならば 4 節のみ言葉です。一緒にお読みしましょう。

26:4 いつまでも【主】に信頼せよ。ヤハ、【主】は、とこしえの岩だから。

私達がしなければいけない唯一のことは、いつまでも【主】に信頼することです。

結局のところ、イスラエルが滅びに瀕しているのは、彼らが【主】に信頼していなかったからでした。
既に何回もみことばで学んでいるように、【主】は彼らとの関係を回復するために何回も預言者を送り、悔い改めのメッセージを聞かせ、彼らを救い出そうとされていました。でも、イスラエルは、その【主】の声に耳を傾けませんでした。だから、彼らはひたすら滅びに向かうしかなかったのです。

そして、これは何もイスラエル人だけに限った話ではなくって、私達を含めた全ての人類に当てはまることです。私達がこの世でなぜ様々な苦しみや困難に直面しなければいけないのか。また、神様がなぜ私達に怒りを燃やされ、裁きと思えるような出来事を経験させるのか。それは私達が神様の声に耳を傾けず、【主】に信頼することをしなくなってしまったからです。
だから、神様はこの世の終わりに置いて最終的な裁きをされるのです。

ところが１節をみるとその裁きの日に、ユダの地である一つの歌が歌われるのだと書かれています。それはどうゆう歌かというと、１節から先ほど読んだ３節の部分です。読んでみましょう。

26:1 その日、ユダの地でこの歌が歌われる。私たちには強い都がある。神はその城壁と塁で私たちを救ってくださる。
26:2 城門を開けて、忠誠を尽くす正しい民を入らせよ。
26:3 志の堅固な者を、あなたは全き平安のうちに守られます。その人があなたに信頼しているからです。

その日というのは、【主】のみわざがなされる日、さばきの日です。
その時に。ユダの地では「私たちには強い都がある。神はその城壁と塁で私たちを救ってくださる。」という歌が歌われるのです。
つまりですね。その日というのは、ただ神様の裁きがなされる日だけではなくって、救いがなされる日でもある。ということなのです。
その救いとは【主】なる神様という強い都に入れられ、その神様という城壁に守

られるという救いです。そして、この救いに入ることができるのは、忠誠を尽くす正しい民なのです。みなさん、ここでいう正しい民というのは、立派な行いをする民ではなくって、「忠誠を尽くす」・・・つまり、最後まで【主】に信頼し続ける民のことなのです。

どんなに理不尽があったとしても、どんな絶望が襲ってきたとしても、【主】を信頼し続けるという志を固く持っているものは、【主】が用意してくださる強い都に入れられて、全き平安が与えられるのです。この3節にある「全き平安」は、原文ではシャローム・シャロームとなっており、完全な平安、平安の中の平安が与えられることが強調されています。

だから、今日のイザヤ書の預言は『その日を信じているあなたたち！　あなたたちは「いつまでも【主】に信頼せよ。」』と、私達に語りかけているのです。
これはユダヤ人だけではなくって、私達にも与えられている神様の約束です。

だから、今日の結論は4節の
「いつまでも【主】に信頼せよ。ヤハ、【主】は、とこしえの岩だから。」
となるのです。

２）【主】に信頼するものが大丈夫な理由
さて、これが結論ですが、なぜ、私達が【主】を信頼していれば大丈夫なのか。その理由についても今日の箇所は教えてくださっています。

①高いものをちりにされる
　一つ目の理由としては、私達を苦しめていた高いところにあるものを【主】はちりに変えてくださるからです。5節、6節をよみましょう。

26:5 主は高い所、そびえ立つ都に住む者を引き倒し、その都を低くして、地にまで下らせ、これを投げつけて、ちりにまで下らされる。
26:6 足がこれを踏みつける。苦しむ者の足、弱い者の足の裏が。

「高い所」と「そびえ立つ都」がちりにされる。といわれていますが、これはおそらく霊的に高ぶっている存在と、実際的に高ぶっている存在。その両方にあてはま

ることでしょう。
　後で出てきますが、イスラエルの国は多くの君主に支配されてきました。実際、列王記とか歴代誌をみてみると、北イスラエル王国、そして、南ユダ王国の両方には多くの王がたったことが書かれています。そして、その多くの王たちは【主】に従わずに、弱いものたちを理不尽に踏みにじっていました。でも、その日、【主】の日がきたならば、そのような人々を踏みにじった王たち、イスラエルの王たちはもちろんのこと、この世の権力者たち、指導者たちは、ちりに変えられてしまうのです。そして、そのようなこの世の権力者たちの背後にいる霊的な存在。イザヤの時代に当てはめるのならバアルとか、アシェラと言った偶像や、サタンと呼ばれる【主】に逆らう者も【主】はちりに変えてくださるのです。
　だから、【主】に信頼し続ける者の道は、最終的には平らになるのです。7．8、9節を読んでみましょう。

26:7 正しい人の行く道は平らです。あなたは正しい人の道をならし、平らにされます。
26:8 【主】よ。まことに、あなたのさばきの道で私たちはあなたを待ち望みます。あなたの御名、あなたの呼び名は私のたましいの望みです。
26:9 私のたましいは、夜にあなたを慕います。まことに、私の内なる霊はあなたを切に求めます。まことに、あなたのさばきが地に行われるとき、世界の住民は義を学びます。

【主】の日、それは、正しい者たちにとっては希望の日であり、切に慕い求めていた日なのです。なぜならば、その日は、信仰者が希望を置いている【主】の栄光が明確にされる日であり、【主】を慕い、【主】を信頼するということが正しいことなのだ。ということが世界に示される日だからです。これが正しい者、信仰者の生き方です。

一方、信仰をもっていない人、つまり、悪しき者の生き方はどうかというと 10 節、11 節を読みましょう。

26:10 悪しき者は、恵みを受けても義を学びません。公正の地にあっても不正を行い、【主】のご威光を見ようともしません。
26:11 【主】よ。あなたの御手が上げられても、彼らは見ようとしません。どうか彼らが、この民へのあなたの熱心を見て、恥じますように。まことに火が、あなた

に逆らう者をなめ尽くしますように。

最終的に悪しき者とされる人たちの特徴というのは、【主】の威光を見ようとせず、【主】の恵みをみても、そこから学び取ろうとしないことです。
神様は、今から 2000 年前、【主】イエスキリストを通して完全な恵みの道、救いの道を示されました。そして、それは世界中に宣べ伝えられています。
にも関わらず、その【主】の恵み、福音を聞いても、それを見ようとせず、そこから救いの道を学び取ろうとしない人は、最終的に【主】のさばきの時には「悪しき者」とされてしまうのです。
　実際、聖書をみて、福音を聞いて、そして、その視点で世界をみれば、【主】の恵み、【主】の救いは明確に示されています。でも悪しき者は一生懸命、それをみないようにするのです。例えば、キリストに恵みがあることを私達が説明しようとすると、まるでアレルギー反応があるかのように認めようとしないし、反発しようとするのです。
　だから、【主】の福音に触れながらも、その恵みを認めようとしない者は最終的には「悪しき者」として扱われてしまうのです。

それとは逆に【主】に救われる者は【主】のことをどのように告白するかというと 12 節をみてみましょう。

26:12 【主】よ。あなたは私たちのために平和を備えてくださいます。まことに、私たちのすべてのわざも、あなたが私たちのためになさったことです。

わかりますか？【主】に救われ、【主】の民とされたものは、自分がなしたすべてのわざも、最終的には、「神様が私達のためになさったこと」だと告白するのです。
つまり、【主】の民は、自分の人生の中にも【主】のみわざがあることを認めるのです。

みなさん、【主】に信頼するってどうゆうことでしょうか。
【主】への信頼というのは、頭の中のことだけではないんです。
実際に生きている私達の人生、行動、生き方のすべての中に、神様の恵みの業がある。私達のための【主】の愛のみわざがある。と信じることなのです。

ですから、【主】に信頼をするということは、世の中の人には評価されなかったとし

ても、一見すると、自分の行動が無駄に終わっているかのように思えることがあったとしても、【主】を信じる私達の行動の中にも、【主】が私達のためになさっている神のわざがあると信じる。これが【主】を信頼するということなのです。

では、なぜそのように信じることができるのでしょうか。
それは【主】が不可能を可能に変えてくださるお方であり、死を命へと変えてくださるお方だからです。

イザヤはここで 2 つの無力なものを上げています。
一つは、この世の王、支配者、指導者たち。
もう一つは、自分たちの力です。まずは 13-14 節を読んでみましょう。

26:13 私たちの神、【主】よ。あなた以外の多くの君主が私たちを治めました。私たちはただあなただけを、あなたの御名を呼び求めます。
26:14 彼らは死人であって、生き返りません。彼らは死者の霊であって、よみがえりません。それゆえ、あなたは彼らを罰して根絶やしにし、彼らについての記憶をすべて消し去られました。

王とか、支配者の役割というのは、民を豊かにするということです。そして、民の豊かさの一番わかりやすい指針は民が増えるということです。
でも、この世の王たちは本当の意味でイスラエルを豊かにすることができなかったし、その王の栄光は死んで終わってしまいます。どんなに成功した王様であったとしても、死んだあともう一度蘇って人々を豊かにするなんてことはできません。むしろ、その記憶は消しされてしまうのです。
だから、この世の王は究極的には無力なのです。

もう一つ、無力なものがいます。それは王だけでなく、私達のことです。16 節から 18 節を読んでみましょう。

26:16 【主】よ。苦難の時に彼らはあなたを求め、あなたが懲らしめられたとき、彼らはうめきの声をあげました。
26:17 子を産む時が近づいた妊婦が産みの苦しみで、もだえ叫ぶように、【主】よ、私たちは御前でそのようでした。

26:18 私たちは身ごもり、産みの苦しみをしました。それはあたかも、風を産むようなものでした。私たちは救いを地にもたらさず、世界の住民はもう生まれてきません。

【主】が、人々を悔い改めに導くために困難を与えるときがあると、私達はイザヤ書からまなんできていますが、その時、私達はもだえるわけです。【主】よ！　と叫びつつ、なんとか産みの苦しみを乗り越えていのちを生み出そうとします。しかし、聖書は、それはあたかも「風を産むようなものでした」と書いています。つまり、自分たちで神の民としてのいのちを生み出そうとしても生み出せないし。自分たちで一生懸命神様に祈って、救いをこの地にもたらそうとしても、神様の世界の住人はうまれないのです。
　君主だけではなくって、私達も神の民を生み出すということに対しては、無力な存在なのです。

【主】は国民を増やし、死人をよみがえらせる方）
では、私達が信頼すべき【主】はどうでしょうか。15 節では、

26:15 【主】よ。あなたはこの国民を増し加えられました。この国民を増し加え、ご自身の栄光を現し、この国のすべての境を広げられました。

と書かれています。つまり、神様は本当の神の民を増やして栄光を現すことができるし、さらには 19 節

26:19 あなたの死人は生き返り、私の屍は、よみがえります。覚めよ、喜び歌え。土のちりの中にとどまる者よ。まことに、あなたの露は光の露。地は死者の霊を生き返らせます。

つまり、私達がもう死んで終わりだ。と思っている状態のものさえ、【主】は生き返らせることができるのです。これは霊的に死んだ人、肉的に死んだ人、その両方に当てはめてよいと思います。

私達は自分の力では、どんなに祈ったとしても、人を生き返らすことも、救いを与えることも、神の民を産みだすこともできません。
でも、神様は神の民を増やすことができるし、死んでおわりだと思ったものさえも

生き返らすことができるお方なのです。

だから、私達はこの世において死ぬことがあっても恐れることはないのです。
イザヤはこのように言っています。20 節、21 節

26:20 さあ、私の民よ。あなたの部屋に入り、うしろの戸を閉じよ。憤りが過ぎるまで、ほんのしばらく身を隠せ。
26:21 それは、【主】がまさにご自分のところから出て、地に住む者の咎を罰せられるからだ。地は、その上に流された血をあらわにし、そこで殺された者たちを再びおおうことはない。

20 節の「さあ、私の民よ。あなたの部屋に入り、うしろの戸を閉じよ。憤りが過ぎるまで、ほんのしばらく身を隠せ。」というのは、【主】のさばきが通り過ぎるまで、【主】の救いの中に身を隠していなさい。ということでしょう。

ただ、一つの解釈の仕方として「例えこの世で死んだとしても、【主】が蘇らせる時まで待っていなさい」という意味も含まれているかもしれません。
なぜならば、21 節の後半で「地は、その上に流された血をあらわにし、そこで殺された者たちを再びおおうことはない。」となっているからです。この箇所も解釈の仕方によりますけども、「地は、その上に流された血」という箇所を信仰を持っているがゆえに流された血、つまり殉教者たちの血というように理解でき、「そこで殺された者たちを再びおおうことがない」というのは、殉教者たちが蘇ったあと、もう一度墓に葬られることがない。　っとそのようにも理解できるからです。

みなさん、神様はですね。私達がこの世の人生において、【主】を信じない人たちからみると無駄死にをしているかのような死に方をしたとしても、決してそれは無駄にはされないのです。なぜならば、【主】は最後まで信頼しつづけたものを、蘇らせ、二度と葬られることがない永遠のいのちを与えてくださるからです。

そして、そのさきには、【主】の永遠の守りと、完全な平安があるのです。
だから、みことばは私達に「いつまでも【主】を信頼せよ。【主】は、とこしての岩だから」というのです。

みなさん、【主】を信頼しつづけていきましょう。

【主】は【主】の民を増やしてくださるお方だし、死んだ者をも生き返らせてくださるお方です。そして、私達のすべての行いの中にも働いてくださって、私達のためのみわざをなしてくださるお方です。

だから、いつまでも、とこしえにこのお方を信頼し続けていきましょう。